

## Kāśikāvṛtti に見られる「文章分割技法」

—vākyabheda と yogavibhāga—

工 藤 順 之

0. Pāṇini 文法学における規則解釈技法としての「文章分割 (vākyabheda)」について、先にその最初期の文献である Bhartṛhari の *Mahābhāṣya-Dīpikā* を取り上げて、そこに用例を確認した<sup>1)</sup>。この文献では、ミーマーンサー学派が理解しているような過誤としての vākyabheda の用例は確認できず、当該規則を分割することなく、規則を二つの文で解釈するか、或いは他の規則との対比において「別の規則」として理解することのいずれかが見いだされたに過ぎない。この限りにおいて、vākyabheda は technical term であるよりは、むしろ解釈技法であると見なせるだろう。今回はそれに引き続いて、Jayāditya と Vāmana (650?) の *Kāśikāvṛtti* に見られる「文章分割」に関する議論を問題にしたい。

1. さて、KV で用いられる vākyabheda は僅かに 2 例であるが、その第 1 例は P. 6.1.94 : eṅi parārūpam 「(先行する<sup>6.1.84</sup> 動詞接頭辞<sup>6.1.91</sup> 末の/a/<sup>6.1.87</sup> と後続する<sup>6.1.84</sup> 動詞語根<sup>6.1.91</sup> の語頭音) /e, o/ に対して、後者 (の 1 音<sup>6.1.84</sup>) が (代用される)」に対する注釈部分に現れる。

KV on P. 6.1.94 [IV, 562] : kecid “vā sUPy āpiśaleḥ [P. 6.1.92.]” ity anuvarttayanti. tac ca vākyabhedena sUBdhātau vikalpaṃ karoti — upedaḥkiyati, upaiḍakiyati, upodaniyati, upadaniyati. この注釈において引用される P. 6.1.92 : vā sUPy āpiśaleḥ は名詞起源の動詞語根について/a/に終わる動詞接頭辞と動詞語根語頭の/ṛ/に vṛddhi 代用の任意適用を教える規則である。さて、92 の “vā sUPi” が 94 に継続するとすれば、名詞起源動詞に対しては動詞接頭辞末の/a/と後続する動詞語根語頭の/e, o/に後者の音の代用を任意とすることを規定することになる。従って、upa + eḍakiyati は upedaḥkiyati と upaiḍakiyati の両形を持つことになる。しかし、非名詞起源動詞に対してはこの代用は任意ではない、e. x. upa + elayati > upelayati. このことを KV は「vākyabheda によって」可能になるとしているが、これは “vā sUPi” を 94 に継続させた後に、規則継続項目を含む 94 を二つに分割することによって、/a/ + /e, o/ > /e, o/ 代用を行った後、名詞起源動詞だけに対する任意適用を許すことによるのである。

- 1) (avaṃñāntād upasargād asUBantāvayave dhātāv) eṅNādu (pūrvaparayoḥ) pararūpam (ekādeśo bhavati);
- 2) (avaṃñāntād upasargāt) sUBantāvayave (dhātāv) eṅNādu (pūrvaparayor) vā pararūpam (ekādeśo bhavati) <sup>2)</sup>.

第2例は P. 8.1.18: anudāttaṃ sarvam apadādu 「(この節から74まで) 全て (sarvam) の(語<sup>8.1.16</sup>) は anudātta をとる, 但し pada の冒頭に用いられない限り」に対する注釈部分に現れる。

*KV* on do. [VI, 262]: sarvagrahaṇaṃ sarvam anūdyamānaṃ vidhiyamānaṃ cānudāttaṃ yathā syād iti. [p. 263] tena yuṣmadasmadādeśānām api vākyabhedenānudāttaṃ vidhiyate.

ここでは、この規則中に規定される sarvam という語の記載目的を巡って議論が進められる。*KV* の説明によると、この語が規則中に記載されていることによって、後続規則に挙げられるもの (anūdyamāna) と (代置項目として) 規定されるもの (vidhiyamāna) の両者が anudātta をとることになる。例えば、後続 19 では anūdyamāna-pada である呼格形の語 (āmantrita) に anudātta が付与され、20 では yuṣmad-/asmad-の両数・第2, 4, 6 格の代置項目として (vidhiyamāna-pada) 規定される vām/nau に anudātta が付与されることになる<sup>3)</sup>。この時、18 から継続してきている anudātta という語が 20 においてどのように読まれるかを説明して、「vākyabheda によって」と言うのである。この読み方は、*Nyāsa* に基づくと、「(分割された) 第1の文によって (yuṣmad-/asmad-に対する) 代置項目 (ādeśa) が規定され、第2の文によってそれらに anudātta が付与される」というものである。

- 1) yuṣmadasmador ṣaṭhīcaturthīdvitīyāsthayor vānnāvau ;
- 2) (vāṃnāvāv iti) yuṣmadasmadādeśānām anudāttaṃ<sup>4)</sup>.

さて、*KV* における僅か2例の vākyabheda からその用法を一般化することは証拠としては極めて脆弱であるが、しかし逆に vākyabheda についての *KV* の認識を探る一つの手がかりにはなるであろう。いずれのケースも先行規則からの接続項目を如何にして読み込むかという点で vākyabheda を用いて説明する。その際、継続した項目を別の文として読むことによって、後続規則そのものの文法操作には抵触せずに更に別の文法操作を行う形になっている。前者では一音代用の後に名詞起源動詞に対する任意適用を、後者では代名詞の特定格に対して代用形を用意した後それらへの anudātta の付与を行う。つまり、規則継続した項目によって後続規則は一つの規則中に二つの操作を持つことになり、その二つの操作が排他的に互いに干渉しあうことなく連続的に運用される為に規則が別々の文で読まれて

いるのである。これは規則分割 (yogavibhāga) と呼んでもいいものであろうか。

2. では yogavidhāga と vākyabheda が競合するケースを取り上げてみよう。実際には、現時点では両者を直接比較させてその優劣を論じた箇所はない。しかし次に挙げる P. 2.4.83 は、*MBh* で一旦は yogavibhāga が提示されながらそれが否定され、他方 *KV* 及びその注釈では vākyabheda が採用される例である。

P. 2.4.83 : nāvayibhāvād ato 'm tv apañcamyāḥ [-a に終わる Av cp. の末に (格語尾の脱落 (luK) <sup>2.4.58</sup> は) 生じないが、(その格語尾に) -am を代置する。但し、第5格の場合は除く]。Patañjali は最初この規則を「Av cp. の末に格語尾の脱落を禁止」する一般規定部分と「その第5格を除く格語尾に-am を代置する」特殊規定部分への yogavibhāga を提示する<sup>5)</sup>。これはこの規則が一つの文として解釈されると、apañcamyāḥ という語が「第5格にはそうではない」という形で先行する一般規定部分に対する否定として読まれる可能性 (即ち prasajyapratishedha 型の否定複合語) があるから、格語尾の省略の禁止が第5格には否定される。その為、あくまでも代用形-am が導入される肯定的規則として読むにはここで一般規定部分と特定範囲に対する代置形導入部分とに分けなければならないのである。

しかし Patañjali はその規則分割を否定する。それは規則中に用いられる tu が apañcamyāḥ のかかる範囲を特定するからである<sup>6)</sup>。つまり、接続詞 tu があることによって、仮に apañcamyāḥ が「第5格にはそうではない」と読まれても、それは規則中において am 以下にのみ係ることが知られるからである。

ところが、Patañjali の解釈によって規則の誤適用が回避できるのも拘わらず、*KV* 及びその注釈書は何故 vākyabheda による解釈を主張するのか<sup>7)</sup>。Nyāsa 註を借りて、この規則の分割を示せば次のようになる。

1) aDantād avyayibhāvād (uttarasya sUPo) na (luG bhavati) ;

2) am [ādeśas] tu (tasya bhavaty) apañcamyāḥ.

Patañjali の解釈は P. 2.4.83 の規則分割 (yogavibhāga) を否定し、運用上はこの規則を二つの操作を規定するものとして見なし、それらが順次適用されることと理解することによって、Pāṇini の規則そのものの wording を変更せずにこの規則を適正に運用することを狙っている。*KV* 及びその注釈書はここでそうした二つの操作を別々の文 (vākyabheda) によって規定されたものとして改めて表明したに過ぎないのである。この点において vākyabheda は yogavibhāga 的な「分割」を表わしうるが、2つ以上の規則を生む解釈ではない。

3. vākyabheda が yogavibhāga と根本的に相違するのは、yogavibhāga が一つの規

則を二つ以上に分割することによって、一方は特殊条件を規定した部分、他方は特定対象域を除けば全てに適用可能な一般的条件を含む部分に分ける方法であるという点である。ここでは、規則の適用対象域が特定部分を切り離すことによって、一般的対象域が示されるのである。ここで改めて一般規定 (utsarga) と特殊規則 (apavāda) の取り扱いを概略示しておけば、一般規則は暫定的にせよ制限なく適用できるものであるが、その適用の可否を巡って対象域を部分的に共有する特殊規則が先行的に考慮されなければならない。実際、そうした手順を踏んで初めて一般規則が無差別に適用可能になるのである。yogavibhāga は一つの規則を分割してこうした互いに抵触しあう対象域を分けるのである。

ところが、vākyabheda ではそうした一般／特殊という対象域の区別が立てられていない。むしろ、連続した操作を明確にしているに過ぎない。換言すれば、一つの規則に規定される二つの操作を一つずつ運用しようとするだけである。先に見たように、vākyabheda は一つの規則に二つの文法操作が規定されている場合に援用され、新たな規則を創出することなく、一つの操作を一つの文が規定するという形で連続的に規則を解釈する方法である。これはミーマーンサー学派においては一つの規定文の二つの規定が盛り込まれる「文章分裂」となるが、文法学では過誤に陥っているのではないことは明白であろう。上述の例でいえば、規則継続した項目を含む一つの文 (=規則) を二様に解釈するが、その解釈にあたってそれぞれ文として読んでいるのである。

---

*KV*: *Kāśikāvṛtti*, with *Nyāsa* of Jinendrabuddhi and *Padamañjarī* of Haradatta Miśra. Ed. by D. D. Shastri and K. P. Shukla, Ratna Bharati Series Nos. 5-10, Varanasi, 1965-67; *MBh*: *Mahābhāṣya*. BORI edition; *SK*: *Siddhāntakaumudī* of Bhaṭṭoji Dikṣita, with *Bālamānoraṁā* and *Tattvabodhinī*. Ed. by Giridhara Śarmā Caturveda and Parameśvarānanda Śarmā Bhāskara, 4 vols. Varanasi, 1958-1961.

1) 抽稿「文法規則解釈における「文章分割 (vākyabheda)」技法—Bhartṛhari, *Mahābhāṣya-Dīpikā* の用例から」『印度學佛教學研究』第 46 卷第 1 号, 平成 9 年 12 月, pp.461-457.

2) この分割に関しては、*Nyāsa* を見よ。[IV, 562]: ... yadi ca “vā sUPi” ity anuvarttayanti, evaṁ sati tena saḥāyaikavākyatāyāṁ sUBdhātor evānena vikalpena pararūpaṁ kriyate, as UPi tu pararūpaṁ na syād etad āha — tac cetyādi / ekavākyatve hi saty eṣa doṣaḥ syāt / na cātraikavākyatā, kiṁ tarhi? vākyabhedaḥ / tena tadihānuvarttamānaṁ sUBdhātāv eva vikalpaṁ karoti, itaratra tu nityam eva pararūpaṁ pravartate / tatrāvarṇāntād upasargād asUBantāvayave dhātāv eṅādau pūrvaparayoḥ pararūpaṁ ekādeśo bhavatiṭi ekam vākyam, avarṇāntād upasargāt sUBantāvayave dhātāv eṅādau pūrvaparayor vā pararūpaṁ ekādeśo bhavatiṭi dvitīyam /

tatra pūrveṇa vākyeṇasUBantāvayave dhātāv upelayatītyādaу nityaṃ pararūpaṃ vidhīyate / dvitīyena tu sUBantāvayave dhātāv upeḍakīyatīty evamādaу vikalpena pararūpaṃ vidhīyate / **vākyabheda**s tu “eṅṅi padarūpaṃ” tanreṇa sūtradvayoccāraṇāl labhyate / sūtradvaye tūccārya-māṇe saty eka eva “vā sUPy āpiśaleḥ” ity etad anuvartamānam api lakṣyānurodhān nābhīsam-badhyate, dvitīye tu sambadhyata eva / tena **vākyadvayaṃ** pūrvoktaṃ sampadyate / また *Siddhāntakaumudī* 及びその注釈 *Bālamānoramā* も同様の見解を示している。SK No. 78 [= P. 6.1.94, I, 93]: iha “vā sUPy” ity anuvartya **vākyabhedenā** vyākhyeyam. teneṅṅādaу (sic.) sUBdhātau vā; *Bālamānoramā* on do. [ibid.]: eṅṅi pararūpaṃ iti prathamāṃ vākyam. avarṇāntād upasargād eṅṅādaу dhātau pare pararūpaṃ ekādeśaḥ syād iti tadarthaḥ. vāsUPīti dvitīyaṃ vākyam. tatra eṅṅi pararūpaṃ ity anuvartate. dhātau upasargād ityādi ca. tatas ca uktapararūpaviśaye sUBdhātau pare pararūpaṃ vā syād iti labhyate. tadāha — teneti. uktaṛītyā **vākyabhedaśraṇeṇa** eṅṅādaу sUBdhātau pararūpaṃ pākṣikaṃ bhavati, taditaradhātau tu nityam ity arthaḥ.

- 3) *Nyāsa* on P. 8.1.18 [IV, 262]: tatrāsati sarvagrahaṇe yad eva siddhasattākaṃ padam anūdyamānam āmantritādi, tasyaivānūdāttaṃ vidhīyate, na tu yuṣmadasmadādeśānām. sarvagrahaṇe tu satī teṣām api vidhīyate.
- 4) *KV* on P. 8.1.20 [VI, 267]: yuṣmad asmad - ity etayoḥ ṣaṣṭhīcaturthīdvitīyāsthayor yathā-saṃkhyāṃ vām, nau - ity etāv ādeśau bhavatas, tau cānūdāttau.
- 5) *MBh* ad P. 2.4.83 [I, 498,15-16]: nāvayibhāvād ata iti yogo vyavaseyaḥ.
- 6) do. [ibid., 20-23]: sa tarhi yogavibhāgaḥ kartavyaḥ na kartavyaḥ. ... tuḥ kriyate sa ni-yāmako bhaviṣyati. am evāpañcamyā iti.
- 7) *KV* on do. [II, 325]: aDantād avyayābhāvād uttarasya sUPo na luG bhavati. amādeśas tu tasya sUPo bhavaty apañcamyāḥ; *Nyāsa* [II, 326]: iha kathaṃ dvayor arthayor vidhānāt, vidhāyake ca vākye dve eva. tatra “nāvayibhāvād ataḥ” ity etat pratiṣedhasya vidhāyakam ekaṃ vākyam. “am tv apañcamyāḥ” ity etad amo vidhāyakam dvitīyaṃ vākyam. ata eva vṛttau **vākyadvayaṃ** upanyastam — “aDantād avyayābhāvād uttarasya sUPo na luG bhavati” ity ekaṃ vākyam, “amādeśas tu tasya bhavaty apañcamyāḥ” iti dvitīyam. tatrāpañcamyā ity anena “anantarasya vidhir vā bhavati pratiṣedho vā” [Pbh 62] iti pañcamyā amādeśa eva pratiṣidhyati, na tv aluK pūrvavākyena vihītaḥ. ata evāluKi satī pañcamyāḥ śraṇaṃ eva bhavati. **ekavākyatāyāṃ** hi satyāṃ kāryadvayasyaikayā pāṭhapravṛtīyā vidhīyamānatvāt kāryadvayasya-pañcamyā iti pratiṣedhaḥ syāt. pañcamīm vrajayitvaitat kāryadvayaṃ vedītyam. **vākyabhede** tv apañcamyā ity etat pratyāsannam ādeśam apekṣate, na tu vākyāntaravihitam aluK.

〈キーワード〉 vākyabheda, yogavibhāga, *Kāśikāvṛtti*.

(東方研究会研究囑託)